九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

中国語の連動式構文、前置詞構文、2重目的語構文、及び兼語式構文の統語論的解釈について

馮, 蘊澤

https://doi.org/10.15017/2332555

出版情報：文學研究. 91, pp.87-102, 1994-03-25. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

中国語の連動式構文、前置詞構文、二重目的語構文、及び兼語式構文の統語論的解釈について

馮　　蘊　　澤

0．はじめに
1．連動式構文と前置詞構文
2．連動式構文と兼語式構文、二重目的語構文
3．終わりに

0．はじめに

ほとんどの現代中国語の構文論のなかで、動詞構文に関しては必ずといっていいほど、いわゆる「連動式構文」、「前置詞構文」、「二重目的語構文」及び「兼語式構文」と呼ばれる諸構文形式が取り上げられる。これらの構文形式の間に密接な内的関連性があるにも関わらず、それぞれが独立の統語構造として扱われるのが一般的である。

本稿では、まず連動式構文と前置詞構文の区別は、意味論的、統語論的、また音韻論的性格から見て必ずしも明確ではないことを述べ、前置詞構文と連動式構文は構造的に同じであることを示す。

さらに、連動、前置詞、兼語式、二重目的語などの動詞関連諸構文の内的関連性に注目して、より深層のレベルにおいてこれらの構文形式が共通の統語構造を持ち、「同定消去」という同一の規則によって表層形式に導かれることを論じる。同一の深層構造を持ちながら、異なる表層形式として実現するのは、

意味的に同一指定の要素として認められるものがそれぞれ異なるためであることを明らかにする。

1．連動式構文と前置詞構文

1-1．連動式構文と「同定消去」の規則

連動式構文とは一般的に次のような「二つまたは二つ以上の動詞や動詞フレーズを連用して形成される文のこと」（劉、藩、故1983、pp.442）として定義されている。

(1)　wo　xi　yi,　zuo　fan.
　　私　洗濯する　作る　ご飯
　　私は洗濯をし、ご飯を作る。

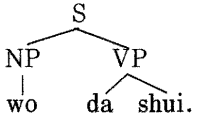
(2)　wo　da　shui　xi　lian.
　　私　汲む　水　洗う　顔
　　私は水を汲んで顔を洗う。

(3)　wo　qu　shang-dian　mai　dong-xi.
　　私　行く　商店　買う　品物
　　私が商店へ買い物に行く。

連動式構文は表面的に「二つの動詞または動詞フレーズが一つの主語を共有する」（劉、藩、故1983 pp.442）形になっているが、藤堂、相原（1985，pp.152）でも述べられているように、これを「二つの文を縮めた表現である」として理解することもできる。すなわち、主語を同一にする二つの文を意味的に関連付けることによって、一つの文として緊縮された結果である。緊縮された文のなかで、二つの動詞文がそれぞれ別々の動詞フレーズとして埋め込まれるが、後続動詞フレーズの主語が先行動詞フレーズの主語と同一指示的な要素であるため、消去（deletion）によって削除され、表面上ゼロ形式となったものと考えられる。従って、このような過程は「同一指示的な要素の消去」の過程

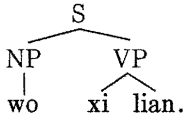
である。消去された要素及び消去の過程を復元すると、次の例のA、B、Cのような形式と仮定できる。

(4) A.



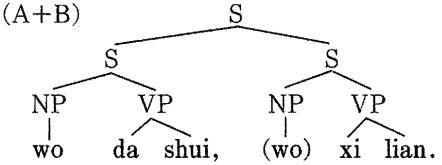
私は水をくむ。

B.



私は顔を洗う。

C. (A+B)



私は水を汲み、　　顔を洗う。

消去されるのが後方の要素であるため、連動式構文において、消去は前向き消去として次のように述べることができよう。

(5)　　A _____ A ⟶ A _____ 0

同一の文中に同一の要素が重出するという「冗長性」を避けるために、深層構造で有形のものをゼロにするための「同一指定的な要素の消去」(以下「同定消去」と略す)は、人間の言語における非常に一般的な規則で、中国語にも見られること、特に連動式構文に見られることは何の不思議もない。ここで同定消去の規則を提起したいのは、この規則を認識することによって、これから考察する動詞構文の諸形式の間に存在する密接な内的関連性を明らかにすることができ、動詞構文を体系的に記述することができるからである。

連動式構文は構造的に二つの動詞フレーズを内包するが、文内部における動詞フレーズ間の意味関係はさまざまである。大ざっぱには次のようなものをあ

げることができる。

(6)a．並列または順番　　wo　xi　yi,　zuo　fan.

私　洗濯する　ご飯をつくる。

私は洗濯をし、ご飯をつくる。

b．VP_2がVP_1の目的　wo　da　shui、　xi　lian.

私　水を汲み、　顔を　洗う。

私が水をくみ、顔を洗う。

c．VP_1がVP_2の手段　wo　zuo　dian-che　shang-ban.

私　乗る　電　車　出勤する。

私は電車に乗って出勤する。

また、実際、動詞フレーズ間の意味関係に語用論的、談話的な要素も密接に関係しているので、話者の意図などによって、さらに多様な意味関係が存在し得る。例えば、上の（６ｃ）について、フォーカスの箇所によって、VP_1がVP_2の手段としても、またVP_2がVP_1の目的としても、説明できる場合がある。

(7)a．ni　zen-me　shang-ban?

あなた　どのように　出勤する

あなたはどのように出勤しますか？

b．wo　[zuo　dian-she] v_1　[shang-ban]v_2.

わたし　乗る　電　車　　出勤する

私は電車で出勤する。

(8)a．ni　zuo　dian-che　qu　nar?

あなた　乗る　電車　行く　どこ

あなたは電車に乗ってどこへ行きますか？

b．wo　[zuo　dian-che]v_1 [shang-ban] v_2.

私　乗る　電　車　　出勤する。

私は電車に乗って出勤する。

従って、連動式構文における動詞フレーズ間の意味関係は必ずしも一定ではない。

1-2. 前置詞構文と連動式構文、同定消去：

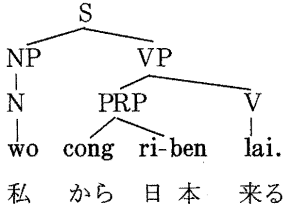
前置詞構文とは一般的に次のような構文をさす。

(9) wo [cong ri-ben] [lai].
私 から 日 本 来る
私が日本から来た。

(10) ta [zai jia] [kan shu].
彼 いる 家 読む 本
彼が家で本を読む。

この中で、先行フレーズに含まれる [cong](9)と [zai](10)が、後続する動詞の付属節として位置付けられ、次のような構造をなすものと考えられている。

(11)



私 から 日 本 来る
私が日本から来る。

その理由として、次の二点のうちのどちらか、または両方がしばしば挙げられる。

1．藤堂、相原（1985 pp.143）では、このような構文が「連動式構文の一種だと考えることができます」としながらも、「前の動詞フレーズの比重が弱くなって、後の動詞（やフレーズ）のありかたを修飾しているのですから、やはり副詞的な修飾語であると考えるのが、当然でしょう。」としている。すなわち、構文的に、前項が副詞的なフレーズで後項の動詞や動詞フレーズを意味的に修飾する関係にあるものは前置詞構文と定義される。

従って、このように定義される前置詞構文は意味関係に基づくものであることがわかる。

2．一方、現行の中国語文法書では、ほとんどといっていいほど、「前置詞（介詞）」という品詞を認めている。前置詞とは、一般的に「場所、時間、手段などを現す名詞フレーズを紹介して、中心となる動詞の前に導入することば」として定義される（藤堂、相原1985，pp.111）、また、（劉、蕃、故1983，pp.167）では、前置詞のつぎのような統語的特徴を指摘している。

a．述語になるなど、動詞のように単独で用いることはできない。

b．動詞のように重ね型動詞を形成したり、助詞の「着、了、過」を後続させることはできない。

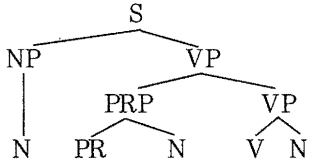
c．単独で統語成分になることはできず、必ず他の名詞や名詞フレーズなどと一緒になって、前置詞フレーズを形成することによって初めて統語成分として用いることができる。

このように、動詞に比べて、前置詞の統語的機能が非常に制限されているので、独立のグループをなしているように思われる。「前置詞」を辞書に明記することによって、先のフレーズ間の意味関係からの定義とは別に、動詞が含まれるフレーズが動詞フレーズとし、動詞の替わりに前置詞が含まれるフレーズは前置詞フレーズとすれば、前置詞フレーズが含まれる文のことは「前置詞構文」として定義することができる。前置詞フレーズを規定するのは、前置詞には上にのべたような動詞と独立した統語的特性を持っている故、構文的に必ず動詞フレーズと共起しなければならない制限があるからと考えられているようである。いずれにしても、連動式構文の構造とは独立する構造として位置づけられている。

しかし、連動式構文と前置詞構文がはたしてこれらの特徴によって区別できるであろうか？　ここでは前置詞及び前置詞フレーズの意味的、統語的、または音韻論的な性格を再検討したい。

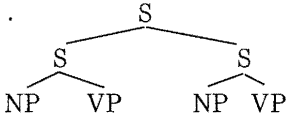
意味構造が違うという視点に従うと、前置詞構文の特徴は、前置詞フレーズと動詞フレーズの間に意味的な比重の差がある点である。従って、動詞フレーズが意味的に「重」で、前置詞フレーズが「軽」という点が、これを動詞文と区別するポイントとされている。このために前置詞フレーズは後続動詞の従属節で、「副詞的に」動詞フレーズを修飾するものと定義される。例えば次の例のなかで、A.では、先行フレーズ［yong gang-bi］（万年筆を使って）が後続する動詞フレーズが現す行為が行われる＜手段、方法、道具＞といった二次的な意味を表しているから、意味的に従属的な地位にあり、前置詞フレーズであるされる。他方、B.ではフレーズ間にこのような比重関係が認められないので、連動式構文であるということになる。

(12) a.



wo yong gang-bi xie zi. 前置詞構文

b.



wo [xi yi], (wo) [zuo fan]. 連動式構文

しかし、上にも述べたように、連動式構文においても、内部に含まれる二つの動詞フレーズの間の意味関係が必ずしも一様に解釈できず、フレーズ間に意味的比重の差が存在するのはむしろ前置詞構文と同様である。次の文では、先行する動詞フレーズが明らかに後続の動詞フレーズを修飾する関係にあるにもか変わらず、これを連動式構文として解釈するのが普通である。

(13) wo-men hua chau wanr.

私たち　漕ぐ　船　遊ぶ

私たちは船を漕いで、遊ぶ。

(14) ta-men zhan zhe shuo-hua.

彼ら　立つ―しながら　話す

彼らは立って、話しをする。

（藤堂、相原1985 pp.143より）

また、先の例（7，8）で示したように、次の文の中の二つの動詞フレーズ間の意味が二通り以上解釈できる、つまり、前者が後者の＜手段＞としも、後者が前者の＜目的＞としても解釈できる。

(15) wo zuo dian-che shang ban.

私　乗る　電　車　　出勤する

私は電車で（に乗って）出勤する。

このように連動式構文の内部に含まれるフレーズ間の意味的な比重関係が必ずしも一定ではない以上、意味関係によって、これを前置詞構文と区別することは不可能である。

このように、ほとんどの文法書では、フレーズ間の意味関係の違いを前置詞構文の第一位の特徴として挙げるが、実際、意味関係に基づく連動式構文と前置詞構文の区別は必ずしも明確なものではない。従って、決定的な根拠にならないことは明かである。

他方、動詞と前置詞の品詞的な違いを認め、先行または後続フレーズに含まれる品詞の違いに基づく統語構造の区別はどうであろうか？

実際に「前置詞構文」として認められる構文の中の「前置詞フレーズ」の中に現れる「前置詞」を、大きく二つの種類に区別される。一つは純粋の前置詞で、先に挙げた前置詞の特徴を備えたものである。例えば、次のような前置詞である。

(16) 場所を表す　xiang（へ、に））

wang（へ、に）

時間を表す　dang（に）

cong（から）

対象を表す　dui（～にたいして）
　　tong（と）
　　ba　（を）
　　jiang（を）
……

もちろん、この類のものはほかにも数多くあるが、ここでは、取りあえずこの類の前置詞のことをA類前置詞と呼ぶことにしよう。

問題は、現代中国語には、もう一つの種類の前置詞があって、この種類の前置詞は動詞にも同形のものがあって、あるいは動詞としても用いられるということができる。次の例のなかで、［zai］はa.においては動詞、b.においては前置詞として解釈されるのが普通である。

(17) a. **ta　zai　jia.**　　zai＝動詞
　　彼 いる　家
　　彼は家にいる。
　b. **ta　zai　jia　kan　shu.**　　zai＝前置詞
　　彼　いる　家　読む　本
　　彼は家で本を読む。

このような動詞・前置詞兼用のものを便宜上B類前置詞と呼ぶことにしよう。

明らかに、たとえA類の前置詞を全部動詞と区別することができ、これをすべて辞書の中に記載できても、B類の前置詞についても同じように記載することは、まるで不可能で、また無意味である。この類の前置詞を動詞と区別する統語論的、形態的な特徴がないからである。従って、たとえ辞書の中に記載できても、A類前置詞の場合のように、特有の統語論的特徴を用いてこれを動詞と区別することはできない。結局、構文の中で用いられているのは動詞なのか、B類前置詞なのかは、具体的な文脈のなかにおける「意味関係」に基づく判別なしには不可能である。すると、動詞構文と前置詞構文を判別する過程とは、まず意味関係によってフレーズに含まれる動・前置詞同形の単語が動詞か前置

詞かの判断を行い、今度再びこのように得られた結論をもとに、連動式構文か前置詞構文かを判断するということになってしまう。従って、辞書において動詞と前置詞を区別して記載することは無意味である。

また、連動式構文におけるフレーズ間の意味関係と前置詞構文におけるフレーズ間の意味関係は必ずしも一定ではなく、従って、意味による前置詞の判断はかなり恣意的で、明確なものではないことも前述の通りである。

このように、連動文と前置詞文には互いを区別する十分な意味的、統語的な特徴を持っておらず、両者を積極的に分類する理由は存在しない。他方、音韻論的には、むしろ反対に動詞と前置詞が同じ扱いが受けられることを示す事実がある。

(18)

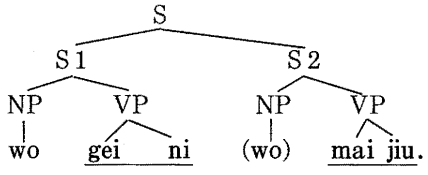
	wo	gei ni		mai	jiu.
	私	与える	あなた	買う	酒
	3	3	3	3	3
a.	[3]	[2	3]	[2	3]
b.	[2	2	3]	[2	3]
c.	[3]	[2	2	2	3]
d.	[2	2	2	2	3]

私があなたのために酒を買う。

上の例はいわゆる北京語声調交替（連続変調）規則の適用領域を示す例である。詳しくは馮（1992）参照されたいが、声調交替規則の適用領域は基本的に構成素領域と一致している。先行フレーズ［gei ni］が後続フレーズの動詞［mai］の従属節で、すなわち前置詞構文だとしたら、可能な交替形式はc.とd.しかありえないことが予測できる。上の例のようにa，b，c，dとも可能なのは、構成素構造としてこの文が次のように分節されたものと見て、初めて説明可能である。

次の文では、先行フレーズ［gei ni］が後続動詞を「副詞的に修飾するもの」として解釈され、一般的に前置詞構文に分類される。

(19)



私　与える　あなた　（私）　買う　酒

（同定（wo）消去）

[wo[[gei ni]　[mai jiu]]].

3　3　3　3　3

a．[3][2　3] [2　3]

b．[2　2　3] [2　3]

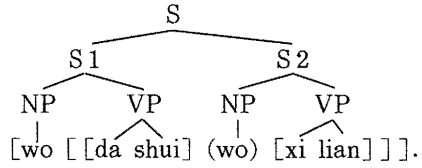
c．[3][2　2　2　3]

d．[2　2　2　2　3]

私があなたのために酒を買う。

これに対して、次の文は一般的に連動式構文と分類されるが、先の前置詞構文と比較して、両者がまったく同じ扱いを受けていることがわかる。

(20)



私　汲む 水　（私）　洗う 顔

同定(wo)消去

[wo [[da shui] [xi lian]]].

3　3　3　3　3

a．[3] [2　3] [2　3]

b．[2　2　3] [2　3]

c．[3] [2　2　2　3]

d．[2　2　2　2　3]

私は水を汲み、顔を洗う。

ここでは、前置詞と動詞が互いに独立する品詞類ではなく、動詞という大類の下位分類として前置詞を位置づけるべきものと考えたい。従って、連動式構文も、前置詞構文も広義においてすべて連動式構文として扱われる。そうすることによって、いわゆる連動式構文と前置詞構文についてはじめてより合理的で、首尾一貫してた解釈が得られる。

まず、動詞のなかにすべての動詞の位置に現れれうるものと、連動式構文の従属節にしか現れないものがあるとする。前者をA類動詞と定義し、後者をB類動詞とでも名付けておくことにしよう。

動詞　A類：連動式構文のすべての動詞フレーズのなかに現れることができる。

B類：（前置詞）連動式構文のなかで、副詞的で、意味的に修飾のフレーズにしか現れない。

B類動詞は従属節にしか現れないが、従属節に現れるのはすべてB類動詞とは限らないので、動詞の類属は統語構造を識別する手がかりにはならない。

連動式構文内部の動詞フレーズ間の意味関係は文脈に依存するもので、必ずしも一定ではない。

2．連動式構文と兼語式構文、二重目的語構文

中国語の構文のなかで、次の(21)のように、「一つの動目フレーズ（VP+OP）と一つの主述フレーズの一部が重なりあった形で述語ができているもの」、すなわち「述語において、前の動目フレーズの目的語は後の主述フレーズの主語をかねている」構文を「兼語式」（劉、藩、故1983，pp.448）と呼び、また(22)のように、「述語動詞の関連する対象が二つあるもの」を一般的に「二重目的語」と定義して、ほとんどの文法書で専門の節を設けてこれらの構文を連動式構文などと区別して扱うのが普通である。

(21) 兼語式構文： wo qing ta ai.
私 招く 彼 来る
私は彼（が来るの）を招く。

(22) 二重目的語構文： ta jiao wo ying-yu
彼が 教える 私 英 語
彼が私に英語を教える。

2-1. 兼語式と連動式構文及び「同定消去」

兼語式の構文のなかに動詞が二つ含まれる。たとえば上の(21)では［qing］と［lai］が、(22)では、［jiao］と［ta］がそれぞれ含まれている。兼語式の名の通り、先行する動詞フレーズの中の目的語名詞が、後続する動詞の意味上の主語をかねているので、深層においては、次のように、連動式と同じ構造であることがわかる：

(23) ［wo qing ta］［ta lai］.
私 招く 彼 彼 来る

二つの［ta］は、統語論的にそれぞれ目的語と主語の担っているが、意味的に同一の対象を指すもので、従って、「同一指定の要素」として認められる。すると、表面的に［ta］が一つしか現れない、すなわち兼語式構文になるのは、先の連動式構文の場合と同じ「同定消去」の原則が働いた結果と考えることができよう。

(24) ［wo qing ta］［ta lai］. 深層形式
——>［ni qing ta (ta) lai］. 同定消去
——> ni qing ta —— lai. 表層形式

連動式では同一要素はそれぞれの動詞が持つ主語に当たるが、兼語式では、先行動詞フレーズのなかの目的語と、後続動詞フレーズの主語が同一要素である点で異なる。

(25) 連動式 [wo da shui] [(wo) xi lian].
私 汲み 水 (私) 洗う 顔
私が水を汲み、顔を洗う。

(26) 兼語式 [wo qing ta (ta) lai].
私 招く 彼 (彼) 来る。
私は彼（が来るの）を招く。

2-2. 二重目的語と連動式構文及び「同定消去」

では、二重目的語構文とは、深層的にどのように解釈されるべきであろうか? 先の二重目的語の例である。

(27) ta jiao wo ying-yu
彼が 教える 英 語
彼が私に英語を教える。

間接目的語と直接目的語のそれぞれの意味上の主語と述語を復元補足すれば、次のような解釈になる：

(28) [ta jiao wo], [(ta) (jiao) ying-yu].
彼が 教える 私 彼 教える 英語

すると、明らかなように、二重目的語も深層において連動式構文とおなじものとして仮定することができる。違うのは、意味的に同一指定的な要素で、「同定消去」規則によって消去されるのは、連動式のように片方の目的語でもなければ、兼語式のように、先行動詞フレーズのなかの目的語か後続動詞の主語のどちらかでもない、後続フレーズの主語と述語の両方である。

(29) [ta jiao wo], [(ta) (jiao) ying-yu]. 深層形式
⟶[ta jiao wo (ta) (jiao) ying-yu]. 同定消去
⟶[ta jiao wo —— —— yong-yu] 表層形式

3．終わりに

いわゆる連動式構文、前置詞構文、兼語式構文及び二重目的語構文は、深層において同一の構造を持つもので、ともに連動式構文である。連動式構文に含まれる二つの動詞フレーズのそれぞれの内部の主語と主語、主語と目的語、または主述両方が意味的に同一指示的な要素である場合、同定消去の規則によって、後方の要素が消去され、表層的にそれぞれ異なる形式として現れる。

これらの形式が共通に持つ深層構造と、それぞれ異なる表層形式を次にまとめて示すことができる。（底線のあるものは同一指定を受ける要素で、（　）の内部は消去を受ける要素を示す。）

(30) 連　動　式　[wo　da　shui]　[(wo)　xi　lian]
私　汲み　水　　(私)　洗う　顔
—— 同定消去 ——
[wo　da　shui　xi　lian]
私　汲む　水　洗う　顔
私が水を汲み、顔を洗う。

(31) 前　置　詞　[wo　yong　shui]　[(wo)　xi　lian]
私　使う　水　　(私)　洗う　顔
—— 同定消去 ——
[wo　yong　shui　xi　lian]
私　使う　水　洗う　顔
私が水を使って顔を洗う。

(32) 兼　語　式　[wo　qing　ta].　[(ta)　lai]
私　招く　彼　　彼　来る
—— 同定消去 ——
[wo　qing　ta　lai]
私　招く　彼　来る
私は彼（が来るの）を招く。

(15) 二重目的語 [ta jiao wo], [(ta) (jiao) ying-yu].

彼が 教える 私　　彼　教える　英語

―― 同定消去 ――

[ta jiao wo ying-yu]

彼が 教える 私　　英語

彼は私に英語を教える。

参考・引用文献

劉、藩、故 (1983):『実用現代漢語語法』外語教学与研究出版社 (相原茂　監訳『現代中国語文法総覧』　くろしろ出版)

藤堂明保・相原　茂(1985):『新訂　中国語概論』大修館

馮　蘊澤 (1993):「北京語声調交替規則の適用領域について」『文学研究』第九十輯　九州大学文学部　編集・発行